

乙見湖休憩舎 夢見平遊歩道

夢見平遊歩道（ゆめみだいらゆうほうどう）は、地元の実業家・築田昇（つくだのぼる）氏（1932～）によって 1991 年に整備された道で、製材所跡地などを通っている。約 2 万 5 千年前、この一帯は湖の底にあったが、火山活動によって徐々に隆起し、標高 1,200 メートルを超えるまでになった。

遊歩道沿いには亜高山性の植物が多く見られる。特に多いのが湿地で生育する植物だ。道を切り開いていたときに、築田氏がミズバショウの咲いている池を偶然見つけ、それが儚い夢のように見えたことから、遊歩道に「夢見平（夢を見る平野）」という名前が付けられた。ウサギコース上にあるこの池は、キツネコースへの分岐点を過ぎたすぐの場所にある。

かつてはウサギがこの一帯でよく見られたが、製材所の労働者から若木を食べる害獣とみなされていたため、北海道から持ち込まれたキツネによって数を制御されてしまった。現在は、サル、カモシカ、ツツドリなどの野生動物がこの一帯に生息している。

夢見平遊歩道の入口まで南西方向に延びる階段を一番上まで上がると、そこは、周囲の山々を一望できる絶景ポイントになっている。最も高い山は火打山（ひうちやま）（2,462 m）で、焼山（やけやま）（2,400 m）からは時折噴煙がもくもくと立ち上がるのを見ることができる。

（注：トイレはウサギコースの開始地点とキツネコースにのみ設置されている）

ウサギコース（自然散策、3 km、2 時間）

このコース沿いには、5 月末から 6 月初めにかけてカタクリの花が咲く。2～3 分歩いたところにある蓑の池（みのいけ）の脇にはカエルの石像が建っているが、これは、6 月にこの池で産卵を行うカエルとクロサンショウウオを表したものである。そこから道は真っすぐ延び、かつての軌道敷に沿って続いていく。以前はこの軌道敷を使って、20 キロメートル離れた現在の黒姫（くろひめ）駅まで荷馬車で木材が輸送されていた。

さらに進んでいくと、稲荷大神（いなりおおかみ）を祀った小さな神社がある。稲荷

大神は稲と農耕の守護神で、キツネと関連づけられることも多い。この神社は江戸時代（1603～1867）に作られたと考えられているが、ある時点で放棄されてしまい、遊歩道の整備時まで再び発見されることはなかった。言い伝えでは、春になると稲荷大神が山から下りてきて稲を守ってくれると言われている。元々、神社は神道山（しんどうさん）へ登る道の途中にあったが、山を下った場所にある2本のカシの木（ミズナラ）の間に移され、そこからハイカーたちを見守っている。

キツネコース（自然と歴史散策、10 km、4.5 時間）

このコースの序盤は、カラマツの2つの木立に覆われている。カラマツはその頑丈さから木材として高い評価を受けている木だ。2つめの木立を過ぎたところにはトイレがある。

その近くには奥が行き止まりになっている脇道があり、進んだ先には樹齢 300 年のカツラの老木が立っている。木の高さは 20 メートル、直径は 3.5 メートルあり、秋になって葉が色づくとき、甘い香りを漂わせる。

（注：この道を行く場合にはさらにもう 1 時間かかる。）

2つめの木立を過ぎると、かつての高田営林署製材所（たかだえいりんしょせいざいじょ）跡地がある。かつて 100 人余りの従業員が働いていたこの製材所は、1932 年に建てられ、およそ 20 年間操業した。かつての住宅地区には小学校もあり、その地区の範囲は、古い炭焼き窯が隣にある氷沢神社（ひょうざわじんじゃ）のところにまで広がっていた。

20 世紀初め、この一帯の木々は建築資材やスキー板用として木材に加工され、枝部分は木炭を作るために使われていた。一帯にはかつて、ブナ、トチノキ、シラカバ、ダケカンバの木が立ち並んでいたが、現在はスギ、カラマツ、シラカバが生えている。

なお、近くを流れる氷沢川（ひょうざわがわ）は新潟県（にいがたけん）と長野県（ながのけん）の県境となっている。